

大学の自治

湯浅 八郎

かつぎ出されるのがこの「大学の自治」というスローガンである。

このスローガンは、わが国の大学に共通した、いわば錦の御旗であるかの觀を呈している。全くやりきれない感がする。

私は元来スローガンは重視しかねている。むしろ何にとなく抵抗を感じる事が常である。ことに大学人がくりかえして叫ぶスローガンには。私はスローガンで動き、スローガンに動かされる社会は未熟でなければ、不健康であるときえ思っているのである。そのような社会は本質的に体質改善を必要とするものであると冷酷に判断しているのである。

日本の教育者にとって最大の課題といわなければ最大に近い深刻な課題は、如何にしてこのようにわがくにを風びしているスローガン・メンタリテイから、大学人を解放し、社会人を救済することであると考へざるをえないのである。私は平常、大学人がいとも安易に無反省に「大学の自治」をスローガンとする風潮にたえがたい憤

今日わがくにの大学において
最もしばしば、最もやかましく
最も荒らあらしく、しかも最も

もつともらしく斉唱せられるスローガンは「大学の自治」ではあるまいか。官公私を問わず、新旧大小を論ぜず、事あるごとに、いな、ことなきときも、教授といわず学生といわず、学内といわず学外といわず、つねに

まんをいだいているが故に、敢てここで大学の自治とは何んぞやと
自問自答を試みて大方の叱正を乞いたいと願う次第である。

*

大学の使命は教育と研究とにある。この使命が肯定せらるる限り
大学は存在する責任があり、存在する権利がある。したがって大学の
自治は事明の主張である、要求である。何故ならば教育も研究も、
大学の自治なくしては学問の自由は保障せられず、学問の自由なく
しては真の研究も教育もその所期の成果を期待できないからであ
る。それだからこそ大学の自治は当然尊重せられ、必然操守せられ
なければならぬのであり、内外の如何なる力もこれを妨害したり
掣肘したりすることは許されないのである。これは余りにもわかり
きったことである。

しからは大学はただ一方的にその自治を主張する権利があるかとい
えば、元よりそうではない。主張するにはその主張を受容させる
に必要な前提がある、そしてその前提条件が満たされる時に初めて
その主張は権威づけられるのである。

もしそうだとすれば、その前提とは何にか。私はその前提とは、
大学内の秩序の確立とその維持だと答へたい。ここにいる学内の秩
序とは、大学の使命達成に必要な共同体としての組織と、その組織
の活動を司配するルールとを指すのである。いうまでもなくこのル
ールは総長、学長、学部長、教室主任、教授会並に理事会、評議員
会、同窓会などそれぞれの責任の分担を定め、その権利の限界を示
し、共同体の各員がそれぞれ許された限界内において相互の権利を
尊重しあいつつ信託せられた責任を果すことに協力するために必要

な約束である。この約束が厳守されてこそ、初めて自治の実現が可能となるのである。ことばをかえていえば、このルールが厳守されない場合には、大学の自治はその基本的前提条件を喪失する。したがって自治の主張は馬鹿の一つ覚えのような空虚なスローガンに堕して無意義なものとなり果てると断じなければならぬ。間違っているであらうか。

更に留意すべき点は、ルールの制定は必然的に責任追及を意味するということである。自治を主張し要求する前に責任の遂行がなければならぬ。責任をとらずしては自治の主張は認められぬ。

*

しからは具体的に大学が責任をとるとは何にを意味するのか。問題は多面多岐であるが、現在の大学の实情に即して端的にその最も重要と考えられるものを指摘すれば、教授会がその構成員である教授の言動に対し、民主的に能動的に責任をもつということである。このことは同僚の勤評をも意味する。更に進んで無責任な言動を敢てする同僚の制裁を意味する。無能または怠慢な同僚の淘汰すらをも意味する。元よりこのような徹底した自粛自制は現在の大学においては全く見られないし、期待すらもてないといわざるをえない。恐らくこのようななまざけない現実を私のようなものが指摘すれば、事実の有無や是非の詮索や反省よりも先に、指摘者は大学の権威を冒瀆するものとしてその不遜を非難攻撃せられるか、嘲笑され黙殺されるのが落ちではあるまいか。私の知る限り、大学という社会はそれほど独善的であり、傲慢であり、無恥である半面をもっているのである。不幸にして現時点においては、大学は公私の別な

く一般的にこのような弱点を内蔵していると判断せざるをえないのであるから、正しい意味では今日の大学には自治は実存しないというのが私の体験である。したがって現状では大学の自治を主張することは偽善でなければノンセンスだといわざるをえぬ。甚だ極端で露骨な表現ではあるが。

さきに述べたような内容をもつ真の自治は実存せず、それかいつて自らその実現に努力もせず、ただ自治のお題目をとなえるに過ぎぬ大学人は、学業を放棄してデモや反抗に没頭する学生同様に、或は学生以上に、自ら大学の自治を裏切り破壊するものといわざるをえぬ、誠に苦々しい限りである。

殆んど一生を大学に深く関係して今日に至っている大学人の一人として私は、私自身大学の自治にどのような積極的な貢献をしたかを自問自答する時、羞恥と悔恨とにさいなまれるものであることを告白しなければならぬのである。しかも、それでもなお私は私ながらに大学の自治をその本質において理解し、その理解にもとづいて自治の具現化に努力しなければならぬとひそかに、われとわがみにいいきかせつづけているのである。これもまた一種の傲慢であり独断であるかも知れぬが。いづれにしても大学人は、大学の自治に関して本質的に誠実であり、謙虚であり、真剣であるべきではあるまいか。そして自治を裏書きする責任について深く反省し、正しく改心し、強く決意すべきではあるまいか。大学という共同体自体の健康のためにも、わが国の将来のためにも。

(元総長・評議員会議長)